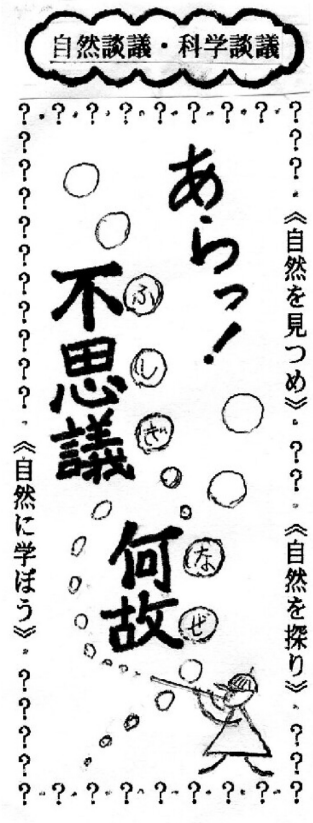

NO．４１（通算47）

絵・文・題字
渋谷　一夫

富士山の謎 ⑪
南畑にも富士山が…

南畑に富士山がある。どこに…？　私の屋敷の片隅だ。昭和４年に「富士講」の人たちが築造したもので「浅間様」（せんげんさま）と呼んでいた。恐らく日本で最も小さい富士山だろう。だが岩石は、本物の富士溶岩だ。石碑も講の歴史を物語っている。これから、その一端を紹介しよう。

富士塚は、あちこちにある。南畑の富士山もその一つだ。面積約70㎡高さ約1m強の最小富士だ。山頂には「浅間大神（あさまのおおかみ）」と記した石碑がある。

山体は岩石と土で構成され、岩石は本物の富士溶岩だ。噴火時のゴツゴツが目立つ。空洞付きの溶岩トンネルもある。山体自体は、「北口本宮富士浅間神社（きたぐちほんぐうふじせんげんじんじゃ）」から見た富士山に似せてある。

山頂の石碑（南より撮影）

「富士講とは」…

昔から、富士山は聖域とされ、登山禁止・女人禁制だった。だが、13世紀、修験者の長谷川角行（はせがわかくぎょう）が役行者（えんのぎょうじゃ）のお告げで、富士の人穴で千日行を行った。この角行が富士講の開祖とされている。

その後、18世紀には食行（じきこう）身禄（みろく）が現れ、男女平等・父母への孝・忠孝の心得などの思想を説いた。そして最後は、富士7合5勺の烏帽子（えぼし）岩（いわ）で、富士の雪解け水だけで断食し、予告通り31日目に入定（にゅうじょう）したという。その教えを弟子たちが更に広め、江戸に八百八講の富士講を作り上げたという。従って「食行身禄」を「富士講の元祖」と言っている。この「富士講」は、江戸に限らず周辺地域にも拡大した。「南畑の富士講」も、その流れの一つだ。

故に、「角行」「食行」の石碑がある。。

富士講の元祖
食行弥勒の石碑

南畑の「富士講」

「南畑の富士講」は、約２００年前「大井講」から分派独立したと、石碑に刻まれている。当初は講員70名、大所帯だ。だが、富士山は誰でも簡単に登れる山ではない。体力もいる資金もいる。昔は乗り物はない。すべて歩きだ。そこで「代参講（だいさんこう）」が発達した。代表者を数人選び、毎年交替で登拝するという制度だ。登りたくても登れない老人や女・子供は、里宮で拝むことにしたのだ。それが富士塚で、「南畑の富士山」もその一つなのだ。

「南畑の富士山」は、昭和４年にできた。

私の祖父・渋谷藤七が先達（せんだつ）の時だ。私の祖父は大正８年から昭和７年までの約13年間、先達の役を務めた。その際、富士山築造の話が持ち上がり、我が屋敷の一部を提供したらしい。

そして、昭和４年に完成したのだ。代参者は、毎年７月下旬から８月上旬にかけて富士山に登拝した。その出発時は、講員はこの南畑の富士山に集まり、登山の無事を祈って、代参者を送り出したものだ。だが、その「富士講」も既に解散し「富士山」だけが残っている。

従って今、私が管理している。

「南畑の富士山」